



石倉吉郎

古浦義己

(本誌編集委員)

四十二年間務めた岩坂陵墓参考地陵墓守部

石倉吉郎さんは、松江市八雲町にある『宮内庁書陵部月輪地区岩坂陵墓参考地』の陵墓守部を四十一年にわたって務められた。

松江市の古志原から南に向かうと、大庭十字路を過ぎ、更に八雲町に入る峠となる。峠を下りると神納橋に行き着くが、土地の人達は神納を“かんな”と言う。

橋の手前を右に折れると、右手に小さな丘陵がある。伊耶那美命が自らの魂を納めたと古事記に伝えられる“神納山”で、そこに『岩坂陵墓参考地』がある。陵墓とは、天皇家、またその関係者の墓として宮内庁が管理する古墳のことという。

『古事記にある比婆山はこの地で、伊耶那美命の御神陵と伝えられている。古くから子受け安産の守護神として広く崇敬されたところである。明治三十三年、宮内省が全国十数か所の伊耶那美命御神陵伝説中、保存すべきものと認定し、陵墓伝説地に指定したものである。現在陵墓参考地として宮内庁が管理している。』

丘陵は石倉吉郎さんの家に隣接し、土地の人は『神納の御陵さん』と呼び古くから崇められていた。

吉郎さんは大正十三年五月二十八日、父の敬と母コトノの長男として旧岩坂村（現在の八雲町）で生まれた。昭和十一年三月、岩坂尋常高等小学校を卒業し、高等科の二年間を終えて青年学校に入る。昭和十七年七月から岩坂村役場外勤書記として勤めていた時、山口県の光海軍工廠に徴用。

大太平洋戦争の激化に伴い、昭和二十年一月に現役入隊となり、広島の部隊から大阪の砲兵工廠へ転属する。そして終戦とな立ち、次のように書かれている。

“比婆之山”は、岩坂陵墓のことであると施錠された厳めしい鉄門がある。その前に、松江市教育委員会の名による説明板があり、九月に復員し、帰郷後は石倉家伝来の

し、比婆山伝説を持つ全国十数か所の中から最も有力な場所として指定された。比婆山や神納の地名が陵墓参考地になった理由の一つであろう。

陵墓守部を務められた石倉吉郎さんの家は古くから地主として栄えた旧家で、吉郎さんは八代目になる。

吉郎さんは大正十三年五月二十八日、父の敬と母コトノの長男として旧岩坂村（現在の八雲町）で生まれた。昭和十一年三月、岩坂尋常高等小学校を卒業し、高等科の二年間を終えて青年学校に入る。昭和十七年七月から岩坂村役場外勤書記として勤めていた時、山口県の光海軍工廠に徴用。大太平洋戦争の激化に伴い、昭和二十年一月に現役入隊となり、広島の部隊から大阪の砲兵工廠へ転属する。そして終戦とな

土地を守りながら農業に従事する。

吉郎さんの曾祖父にあたる石倉家五代の英一さんは、岩坂村役場の収入役を務め、島根県嘱託として当時の松江・広瀬線道路の改修工事の指揮にもあたつたという。

明治三十三年、『神納のご陵さん』が『岩坂陵墓伝説地』に指定された時、曾祖父英一さんが陵墓の監守に任命された。以後、石倉家は、代々陵墓の守部を務める。

昭和四年からは、吉郎さんの父、敬さんが務めた。昭和三十六年には監守の名稱が、『非常勤陵墓守部』と変わり、昭和



岩坂陵墓参考地正面

門に続いて白い砂が敷き詰められ、上に行くと、円墳が現れる。塚状古墳で、江戸時代に作られたと思われる来待石の祠がある。しかし、誰でも入ることができるというわけではない。古墳研究者であっても、宮内庁の許可が必要で特別な場合に限る。これまでに、咲いている風蘭を持ち帰ろうとした人があつたり、裏側の土手にある苔を剥いだ人やカメラを手に柵を乗り越えて入った人もあつた。吉郎さんは、常に見張りを続け気を遣つたという。

制帽をかぶり官服を着て、威儀を正し、毎日一回は必ず見廻りの巡回をした。訪ねて来る人があれば、同じように身なりを整えて外からの案内をする。

巡回時も、御陵内の同じ場所を出来るだけ踏まないようにする。歩くことにより道

目を担つた。宮内庁からの人事異動通知書には、「陵墓守部（非常勤）に採用する月手当二千円を支給する」とある。

陵墓の鉄門前に、宮内庁による立ち入り禁止の立て札があり、「みだりに域内に立ち入らぬこと、魚鳥等を取らぬこと、竹木等を切らぬこと」という三項目が書かれ、入るには、宮内庁の許可を必要とする。

門に続いて白い砂が敷き詰められ、上に行くと、円墳が現れる。塚状古墳で、江戸時代に作られたと思われる来待石の祠がある。

しかし、誰でも入ることができるというわけではない。古墳研究者であっても、宮内庁の許可が必要で特別な場合に限る。

これまでに、咲いている風蘭を持ち帰ろうとした人があつたり、裏側の土手にある苔を剥いだ人やカメラを手に柵を乗り越えて入った人もあつた。吉郎さんは、常に見

張りを続け気を遣つたという。

そんなこともあつて、年に一回は、松江警察署長、村長、駐在所に挨拶に行つていった。吉郎さんの謹厳実直さがうかがわれる。

後年、健康を危惧した吉郎さんは、平成二十四年十二月三十日に退職した。

その大晦日は、四十一年に及ぶ陵墓守部の最後を飾る日であった。

がつくからである。

宮内庁からは管理上の指示がある。公園のようにきれいにし過ぎてはいけない、みだりに陵墓内に刃物を入れて木や枝など切つてはならないなどである。かと言つて、荒れた土地のようにしてはいけないと。そうすることで自然のままに、陵墓としての森厳さを保つのである。

「ですから、そのさじ加減が難しかったのです」と、吉郎さんは微笑めた。

木々の枝や草が伸びれば、作業服に着替えての剪定や草刈り、掃除に精を出す。

吉郎さんは一年に二度、陵墓の前に祭壇を作り一人で祈つた。「私が管理している間に、最も心配したのは地震があつて陵墓の周囲にある石垣が崩れないだろうかということでした。ともかく、宮内庁の監督に従つて、遺漏のないようにしていたのです」と、吉郎さんは締め括る。

そんなこともあつて、年に一回は、松江警察署長、村長、駐在所に挨拶に行つていった。吉郎さんの謹厳実直さがうかがわれる。

後年、健康を危惧した吉郎さんは、平成二十四年十二月三十日に退職した。